

が行く。彼のライトが見えなくなると、彼の呼び声も言葉とならない。ただガーンと響きわたるのみである。彼にしてはインターホンを便うのも、もどかしいのだろう。必死が故にいたずらに焦っているのが、我事のように良く分る。だがどんな状態が全く想像の域を出し得ない。行けるものなら、その前まで行って様子をこの目で確かめたい。全くじれったくてしょうがない。こうなると中継点を利用してのコミュニケイトは、いよいよまだるっこく感じられる。そこで第Ⅲホールのキーステーションと直接つないでくれーと叫ぶ。自分自身の非常に興奮した状態が良く分るのである。が、その興奮は、今現在未知のペールの向う側で必死になって戦っているパートナーの興奮そのものなのだと思う時、自分の興奮した声は、滝の水を受けている伝達器に叩きつけられてしまっているのがあった。そうして次々と三人の隊員が、底無し井戸のような竖穴のゴウゴウと落ちる水の中を、梯子の長さが十分あることを信じてつもある懸念を持って未知に向かったのである。そして不安と焦燥の中で急に足元が、揺れ無くなり、そこが底であることを知った刹那、これが過去四年間、多くの人々が、若き情熱を持って挑み続けた最深部なのかと、何かあっけない感じと共に、やっと成し遂げたという安堵に陥った。ペールを脱いだ千里洞の姿は、急に我々に、今までの怖れおののき等の畏敬の念が、あっけないほど薄れ、身近な存在として感じられるようになった。今まで冷たくライトに光って物言わなかった岩さへ、我等に何かを言わんとしているようでもあった。全撤集作業を終へ、暗から明の世界に出た時、そこには目にしみる青い空、白い雲、雪溪、緑の木々、そしてにこやかな友の顔があった。それはまさしく現実であり、大空を見わたせる、遠く遙かまで見わたせる地上の世界であった。

ただ今は静かに千里洞を思うのであるが、もし再び、その前に立つことがなかったとしても、千里洞に対する畏敬の念は、決して我々の胸から消え去ることは無いであろう……。

探 検 合 宿

久 保 貞 雄

青海とは新潟県の西南部、西頸城郡に在り西は天下の名勝「親不知」に、東はフオッサマグナで知られる糸魚川に、北は日本海の荒海に、そして南は登山のメッカ北アルプスに囲まれた、山口県の秋吉台と同様日本有数の石灰岩地帯として知られている。事実、町には黒姫山を中心に北

画、西面などに大きな石灰工場が立ち並び町の経済、工業の中心となっている。そして我々の活動地「マイコミ平」は、西はヒスイで知られる黒姫山に東は岩登りで知られる明星山で囲まれたカルスト地形をあらわした無数のドリーネと洞窟によって代表される一種の盆地である。我々がマイコミ平を舞台に、ケイビングの対象として「青海千里洞」に探検活動をおこしてから4年目において-405mという堅穴洞窟に於ける日本最深記録を樹立し、一応活動を終えることが出来た。

※

※

※

いつものことながら夜行列車の眠りは浅い。初日のボッカのことを考えれば、この暑さと寝不足は皆を不安にさす。青海は明るい町である。何か北陸の町という言葉から受ける暗い感じなどさらさらでない。青海駅では町役場の渡辺さんが待っていて下さる。この人がいなければ我々の活動も半減されたであろう。我々は幸運であった。

※

※

※

さあ、出発だ。ここまでは林道が続き、車が我々のボッカを代ってくれたが、今からはこの肩が、この足が荷物がかつがなければならぬ。林道から酒沢へと下る。ここは、ガレ場で重荷にふられ転ぶ者続出。ブッシュをかきわけ4時間半かかってやっとテント設営地へ。こんなひどいブッシュの中を道をつけてくれた先輩方には本当に頭が下る思いである。ベースキャンプにはテントが5張り、このブッシュとドリーネと洞窟しかない山中に突然20人のむさくるしい男達が生活する部落が出現した。1人の酋長を中心に約16日間の合宿がいよいよ始まった。

※

※

※

尾根を登っていると思っていたら、それが千里洞のドリーネの外壁である。学問として頭の中で知っていたドリーネと実際のドリーネとの違いは余りにも大きすぎた。まったくでかいドリーネである。それから又びっくり。ドリーネの底には大きな雪田が残っている。まさか標高650mそこそこのこんな所に夏になるまで雪があるとは。

さすが千里洞の口は大きい。何か電車が通れるほどのトンネルが下向きに山の中にもぐりこんでいるようである。その上、その口は始終白い息をふき出している。まったく無気味な所である。予告なしにこんな所に連れて来られればこの世の物とは信じられないだろう。それにこの寒さである。まったく夏というのにこの寒さはどうであろう。このドリーネの中はまだ冬である。その上洞口は厳冬である。地下足袋でいる我々は雪溪で足を冷やし、洞口で足を冷やし、足の冷めたさだけは泣き出したばかりである。

※

※

※

今日、8月6日始めて2人の者が、今年の洞内状態を偵察するために入洞する。洞窟に吸い込まれていく者を見つめる目は皆真剣である。いよいよ5度目の挑戦をこの洞窟は受けようとしている。洞窟は今度もまたその挑戦を拒もうとして様々な困難を我々に課すであろうし、我々は今度こそという情熱を武器として、その困難をぶち破ろうとしている。この戦いこそ我々が青春をかけようとしている探検活動である。昼過ぎ、2人の者が洞窟より出てくる。さっそく火を囲んで話が始まる。今年は例年になく洞内の雪渓が多いとのこと、それでは洞内が考えた以上に寒いのではないかと早速心配になってくる。またそれと反対に嬉しいこともある。例の70mの滝にはほとんど水がないとのこと。これには皆喜んだ。さあ明日から頑張らなくては。

※

※

※

朝の食事当番はつらい。寝ぼけまなこでシェラフを飛び出し、先ず鍋を下げて水場まで眠気をさましてくれる長い散歩である。まったく長くて歩きにくい溜沢の散歩である。沢を歩けばすぐに眠気などふっとんでしまう。それには2つの原因がある。1つは朝のすがすがしいびんとひきしまった冷氣と、もう1つはそのひきしまった冷氣を破るアブの来襲である。アブはいつ眠るのかと心配するほど早朝の我々を身をもって歓迎してくれる。アブ曰く「さあ朝メシが来たぞ、たっぷりかぶりつけ」と。米を洗っていても、野菜を切っていても、火をおこしていてもまったくお構いなしである。我々の座わる所は彼らの死骸が10匹、20匹と落ちている。そうこうするうちに朝メシもでき上る。食当の呼ぶ声に残りの者もテントから起き出し、この遠いエサ場まで食前の運動をしながらやってくる。朝の挨拶が済めば、最も楽しい時間が始まる。こんな山奥の色気などまったくなにもない世界では、くい気だけが我々を幸福にしてくれる。スプーンと食器と皆の体全体が食べる幸せを、みそ汁と御飯とともにかみしめているかのようなのである。食後のお茶とタバコとともに、その日の予定がリーダーから話される。今日からいよいよアタックである

※

※

※

青海に来て初めて足をのせるワイヤ梯子の長さは垂直に落ちこむ65mである。洞口では目立たないキャブライトの明りも、体が一步一步洞窟に吸い込まれていくうちに、この明りが後で我々の目にする最も頼りになる光であるとわからせてくれる。大きな期待が武者ブルイをさせる内に、雪と氷に囲まれた第Ⅰホールは65m上から落ちてくる日の光に雪渓がほのかに光り、何とも言えない所である。そうする内にも洞口からはどんどん人と荷物が降りてくる。食料や装備の入ったこれらの一斗カンとワイヤ梯子等の荷物を持って第Ⅱホールへと向う。途中のチムニーで登り降りしている内に汗が吹き出してくる。まさか寒い寒いと教えられていた洞内で汗をかくとは思ってもみなかった。第Ⅱホールは、うしろを雪渓で押えられ前は垂直の70mの滝

で常闇の世界である。汗がひき始めると急に寒さが身にしみてくる。濡れた地下足袋の中の足はそれこそもう感覚が無くなっている。第Ⅱホールでの荷下ろしは、予想より時間が食う。荷物やワイヤ梯子が一つ一つ下ろされ、とうとう自分の番となる時はもう寒さで体がこわばっている。さあ、いよいよ体を動かすことができる。1段1段ワイヤ梯子を下って行くが、さすが70mの滝はすごい。第Ⅲホールから照らしてくれる光はすぐ眼下に見えるのに降りても降りてもなかなか近づこうとしない。手がカチカチになる頃、やっと第Ⅲホールに降り立つ。早速、帰りにこの滝に登れるか心配になってくる。第Ⅲホールは、さすがにでかい。アタックテントは2張りすでに出来上がっている。夕食後、第Ⅳホールまで様子を調べに行く。戻る時は支洞(ルート881)を通る。ここは水により浸食された土の造形が美しく神秘的である。天井の高さが0.5mぐらいのルート0を通してアタックキャンプに戻ると、あとは眠りだけである。新しい世界を知った長い1日が終わる。

※

※

※

寒さで眠りが浅い。暖かい朝食をとっていた時、第Ⅱホールから天候、その他の連絡がトランシーバーを通して入る。心配された雨も、しばらくは大丈夫らしいし、あとは行動あるのみである。昨日調べて来た第Ⅳホールを通り、そこに降りる20mのワイヤ梯子を降りて第Ⅴホールに達する。ここより地下水の流れが激しくなる。ここからは4名がすでに昨年トレースされた五段坂へと下って行く。しかしその五段坂より下はまだ我々にとって未知の部分である。いよいよアタックを開始する。ワイヤ梯子がどんどん下され、トップの者が降りて行く。地下水流は激しい。第Ⅲホールのアタックキャンプから第Ⅴホールへ、第Ⅴホールからアタック部分へつながれたインターホーンからは、アタック部分よりの連絡がはいる。聞こえるのは激しい水の音と声にもならない必死な叫びだけである。アタックキャンプに残された連絡係の落ち着いた声とはまったく対照的である。第Ⅴホールでビレーする者も大変である。しかしアタック部分より最深部に到達したとの連絡がはいった時、皆の胸にはこの寒さとは反対の暖かいものが流れる。とうとう4年目、5度目のアタックによってついに最深部に人間の足跡が印された。続いて3名が最深部へと下って行く。

※

※

※

1日後、とうとう洞窟を出る日がくる。心配した70mの滝も汗をかき上り、第Ⅰホールへと向かう。地底に眠る雪渓を登るうちにはるか頭上の洞口より太陽の光が入っているのを感じる。ヘッドランプやローソクでは味わえない暖かさが感じられる光だ。最後の65mのワイヤ梯子を登りながら、ますます明るくなる光りに嬉しさをかくせない。1人にやにや笑いながら他人

が見れば馬鹿ではないかと思われるほど嬉しい。洞口に登りつき、これほど地上の世界が美しいと感じられるのは幸福である。かくして最深部はおとされた。青海千里洞に続いてマイコミ平の洞窟の調査が行なわれた。その結界以前から目をつけられていた銀路洞は洞窟がなくドリーネ内の雪溪とドリーネの壁に出来たシュルンドを下ったのみであった。またその結果とは逆にすばらしい洞窟、銀鳳洞も発見出来た。この洞窟は洞口に関しては千里洞より大きいと思われる。こんな大きな洞窟が今まで人間の目にふれられず残っているとはマイコミ平の秘境さに新ためて驚かされる思いである。

※

※

※

下山の日は朝からあわただしい。これでアブと別れることが出来ると思うと淋しさの中にも嬉しさが隠せない。忙しいにも皆の活気が渦巻いているようだ。ここまで来るのに行きは4時間半かかったのに帰りは1時間である。皆のペースも自然と早くなってくる。林道の最終点で待っているトラックが見えるのも、もうすぐだろう。

13. 記 録

第1次～第5次調査

集 録 内 田 典 夫

第1次青海小穴調査記録

記 ・ 川 上 正 明

期 日：昭和40年8月16日～27日

隊員構成：松本(C.L.)、三戸(S.L.)、藤井(装備)、岡崎(食糧)、川上(記録)
高橋 水島 岩本

8月16日

18:00 大阪駅集合

22:20 新潟行にて出発 松本以下7名